

OCCASIONAL PAPER

Neurology and surrealism: André Breton and Joseph Babinski

Joost Haan,^{1,2} Peter J. Koehler³ and Julien Bogousslavsky⁴

1 Department of Neurology, Leiden University Medical Centre, 2300 RC Leiden, The Netherlands

2 Department of Neurology, Rijnland Hospital Leiderdorp, 2353 GA Leiderdorp, The Netherlands

3 Department of Neurology, Atrium Medical Centre, 6414 PC Heerlen, The Netherlands

4 Department of Neurology, Centre for Brain and Nervous System Disorders—Genolier Swiss Medical Network Neurocentre, CH-1823 Glion sur Montreux, Switzerland

Correspondence to: Joost Haan, MD, PhD,
Department of Neurology K5Q,
Leiden University Medical Centre,
PO Box 9600,
2300 RC Leiden,
The Netherlands
E-mail: J.Haan@lumc.nl

Before he became the initiator of the surrealist movement, André Breton (1896–1966) studied medicine and worked as a student in several hospitals and as a stretcher bearer at the front during World War I. There he became interested in psychiatric diseases such as hysteria and psychosis, which later served as a source of inspiration for his surrealist writings and thoughts, in particular on automatic writing. Breton worked under Joseph Babinski at La Pitié, nearby La Salpêtrière, and became impressed by the 'sacred fever' of the famous neurologist. In this article, we describe the relationship between Breton and Babinski and try to trace back whether not only Breton's psychiatric, but also his neurological experiences, have influenced surrealism. We hypothesize that Breton left medicine in 1920 partly as a consequence of his stay with Babinski.

Keywords: André Breton; Joseph Babinski; surrealism; history; hysteria; psychosis

'Our brains are dulled by the incurable mania of wanting to make the unknown known, classifiable...'

André Breton, *First Manifesto of Surrealism*, 1924

未知のものを既知のものに、分類可能のものに

ひきもどそうとする始末におえない狂癖が、

頭脳をたぶらかしているのだ。(巖谷國士訳, 岩波書店)

'Beauty will be convulsive or will not be at all.'

André Breton, *Nadja*, 1928

美とは痙攣的なものだろう、それ以外にはないだろう。(巖谷國士訳, 岩波書店)

シュルレアリスムとは：

シュルレアリスム（フランス語：Surréalisme, シュルレアリスム）は、芸術の形態、主張の一つ。

日本語で超現実主義と訳されている。シュルレアリスムの芸術家を「シュルレアリスト（仏：surréaliste）」と呼ぶ。

日本においては和製英語流にフランス語と英語の発音をつぎはぎして「シュールリアリズム」

（英語の発音は [səˈriːəlɪzəm] 「サリーアリズム」）、また日本語において省略して「シュール」と呼称する場合もある。

「シュール」は日本国内においてシュルレアリスム自体を意味する場合が多く、ジョーク（ブラックジョーク）の一種として扱われることもある。(Wikipedia)

Breton によるシュルレアリスムの定義：

シュルレアリスム。男性名詞。心の純粋な自動現象(オートマティスム)であり、それにもとづいて口述、記述、その他あらゆる方法を用いつつ、思考の実際上の働きを表現しようとする。とくわだてる。

理性によって行使されるどんな統制もなく、美学上ないし道徳上のどんな気づきからもはなれた思考の書きとり。

百科事典。(哲)。シュルレアリスムは、それまでおろそかにされてきたある種の連想形式のすぐれた現実性や、夢の全能や、思考の無私無欲な活動などへの信頼に基礎をおく。他のあらゆる心のメカニズムを決定的に破産させ、人生の諸問題の解決においてそれらにとってかわることをめざす。

(「シュルレアリスム宣言・溶ける魚(アンドレ・ブルトン著、巖谷國士訳、岩波文庫)」46 ページ)

Introduction：

- ・シュルレアリスムの創始者である Andre Breton (1896-1966) は 1913~1920 年に医学を学んでいた。
- ・Breton は Sigmund Freud の影響を受けており、シュルレアリスムには精神医学や精神分析の影響が見られる。
- ・Babinski は Breton に何度も会っており、Breton の “第一次シュルレアリスム宣言” で言及されていることから、Breton には Babinski の影響がありそうである。

Breton と精神医学：

- ・Breton は 1886 年に Tinchebray (ノルマンディー) に生まれ、1913 年に医学を学び始めたが、すぐに戦争に駆り出された。
- ・1916 年から彼はナントの病院の用務員、そしてパリ東部の Saint-Dizier にある第二軍隊の精神神経センターの学生となった。そこでは彼は精神鑑定医 Raoul-Achille Leroy (1869-1941) と共に働き始めた。Leroy の勧めにより、Breton は Jean-Martin Charcot, Emil Kraepelin, Sigmund Freud などの論文を夢中になって読んだ。
- ・1917 年の 9 月から実際にピティエ病院の Babinski の下で non-resident student として働くことになった。その年のうちに Breton は Val-de-Grace の軍病院で学ぶことになったが、medical doctor の資格をとることはなかった。

Surrealism：

- ・戦争から間もなくして、Breton は Dada らの前衛芸術家と交わるようになった。彼は Jacques Doucet (1853-1923) のコレクションに索引をつけたり、Marcel Proust の “Le Cote de Guermantes (「失われた時を求めて」の一部)” の校正をした。
- ・1919 年に Breton と Philippe Soupault は、思い浮かんだことをそのまま綴る自動書記(automatism)による “Les Champs Magnetiques” を出版した。これはシュルレアリスムの最初の作品とみなされている。
- ・心理的自動書記は 1850 年頃の精神神経科医 Jules Baillarger にまで遡る。彼は患者に思い浮かんだことをそのまま記述させた。その技術は Pierre Janet の “subconscious fixed idea” により主に Charcot の研究室で発展した。
- ・1920 年代初旬の自動書記の強調は、シュルリアリスト達が自身の芸術作品を創作する過程で、ヒステリーや精神病患者の体験とパラレルな面を求めたのではないかと推測されている。1920~1930 年代を通して、彼らはヒステリーや精神疾患の要素を仕事に組み入れ、それを合理的な世界を拒絶する精神的開放の一つの形式だとした。
- ・自動書記の次の重要なトピックは “夢” のサイエンス” と、新たなメタファーの発展であった。Breton はシュルレアリスムにおける夢の役割を強調するとき、主として Freud に言及したが、Hervey de Saint-denys や Vaschide といった先駆者たちのことを良く自覚していた。
- ・ “狂気” というテーマの重要性は、ナジャとの恋愛を書いた Breton の部分的な自伝 「Nadja」にも 1928 年から描かれている。彼らはパリの通りを怠け者としてさまよう。そして最後に、ナジャが精神を患っており、療養所に入所しなければならないことが明らかになる。ナジャは、これまで統合失調症、ヒステリー、境界型人格障害などと診断されてきたが、幻覚を生じる精神疾患にも罹患をしていたことは明らかである。実際のナジャ (Leona Delcourt) は、1941 年に死亡するまで精神病棟で過ごした。
- ・ナジャ (Delcourt) は、長期療養所の前に入院していた Sainte-Anne 病院の精神科チーフであった Henri Claude が持つ写真に写っている。Claude は過去に神経内科で働いており (中脳症候群を記載している)、Babinski を良く知っていた。Breton は Sainte-Anne 病院の日曜日のセミナーによく参加し、楽しんでいたが、Claude の額を強調した写真の下に不愉快なコメントを書いている。

Babinski :

- Joseph Babinski は組織学者及病理解剖学者として研鑽を積んでいたが、Charcot に会ってからは、臨床神経学者に転向した。彼は結婚せずに、兄の Henri (有名な料理本「アリババ (Ali Bab)」を著している) と共に暮らしていた。
- 1905 年、Charcot のもとで働いていた有名な眼科医 / 神経内科医である Henri Parinaud が死去した後、Babinski はその 3 人の孤児 Ebba, Ellen, Karen の後見人になった (Parinaud の妻は 1904 年に死去していた)。
- Charcot と Charles Bouchard との確執から、Babinski は教授試験を通過することができず、学位も取得できなかった。1895 年に Babinski はピティエ病院に移り、そこで 1922 年に引退するまで働いた。Babinski は有名な「足底反応」、及び器質的疾患とヒステリー性片麻痺を鑑別するいくつかの検査を記載したばかりでなく、病態失認 (anosognosia), 病識欠如 (anosodiaphoria), 測定過大 (hypermetria), 偽脊髄癱 (pseudo-tabes), 脳幹病変、神経梅毒、下垂体腫瘍などについて出版した。彼の時代に、神経学は内科学や精神医学から独立した一分野となった。
- Babinski のヒステリーに関する最初の論文は Charcot に着想を得たものだったが、Babinski は後に多くの臨床徴候をヒステリーから除外した。Babinski は Charcot がそのコンセプトを拡大解釈しすぎていると考えていた。彼は暗示によって作られた疾患を “pithiatism” と呼ぶことを提唱した。

Breton and Babinski: distance and admiration :

- Babinski は Breton に、自身が書いた「Hysteria-Pithiatism」の本を贈呈した。
- Breton と Aragon は、ヒステリーを「世紀後半の偉大な詩的発見」とみていた。彼らはヒステリーを暗示に格下げした Babinski とは距離をとったが、Babinski を「この問題について最も知的な男」と評してもいた。ナジャの改訂版には Breton によって Babinski に対する賞賛が強調されている。

Did Breton have leave medicine because of Babinski? :

- Breton は何故医学の分野から去ったのか一切明らかにしていない。
- Breton の手紙は、彼の意志により死後 50 年間は開示されておらず、2016 年までは彼が医学を去った手がかりを知るのに利用することができない。しかし、Fraenkle の手帳に Breton の手紙の抜粋がある。
- Babinski のもとで、Breton は文学と医学のどちらを取るかで迷っていたが、その頃、Apolinaire や Reverdy といった詩人からの強い刺激を受けていた。
- Breton は Babinski の診療技術を賞賛していたが、無意識や感情に対する態度が Breton がかつて Saint-Dizier 時代に貪り読んだ本と正反対だったという推測ができる。

Babinski with a fake beard :

- 1920 年、“ Les Detraquees (The Deranged Women)” という劇が上演された。それは Pirre Palau が Olaff の助けを借りて書いたとされるが、Olaff の正体は不明であった。Olaff の正体は、Breton の 1956 年の Le Surrealisme meme、また、Naja の 1962 年の reprint で明らかにされた。Olaff は Babinski であり、初演に付け髭をつけて出演していたのだった。

Conclusion :

- Babinski の影響は Breton が神経学者になるほどのモチベーションを与えなかった。
- Breton は Charcot の身体的説明や、Babinski の “pithiatism” でもなく、“pure psychic automatism” と狂気を見出し、それをシュルレアリスムの芸術要素として用いたのだった。
- Breton の Babinski への賛辞は、第一次シュルレアリスム宣言に見出すことができる。Breton が何故医学をやめたのかははっきりわからないが、数年後に彼の手紙が利用可能になれば、明らかになるだろう。

「シュルレアリスム宣言」に見られる Babinski についての記載：

科学者の方法についていえば、私はそれを私の方法とおなじ価値のあるものとみなす。

私はかつて足のうらの皮膚の反射作用の発見者が仕事をしているところを見た。

彼はやすみなく被験物をいじくっていたが、やっているのは「診察」とはまったくべつのもので、彼がもはやどんなプランもあてにしていなかったことは明らかだった。ときどき、長い間をおいて所見をしたためののだが、だからといってピンをおくわけではなく、他方、彼の小槌はあいかわらずすばやく動きつづけていた。

患者の治療はというと、そんなくだらない仕事はほかの者にまかせていた。

彼はその聖なる情熱にすべてをそそいでいたのである。

(「シュルレアリスム宣言・溶ける魚(アンドレ・ブルトン著、巖谷國士訳、岩波文庫)」83 ページ)

「ナジャ」の注釈に見られる Babinski についての記載：

この作者たちのまぎれもない正体については、三十年後によく明らかにされた。

一九五六年になってはじめて、雑誌『シュルレアリスム、メーム』は、この『気のふれた女たち』の全文を発表することができたのだ。そこに付されている P-L・パローによるあとがきが、この芝居の制作過程を説明している。

「[この芝居の]最初の着想は、パリ郊外のとある私立女学校を背景にしておこった、いささかいかかわしい事件から思いつかれたものだ。けれども私がその着想を用いるべき劇は、一双面劇場なのだから一、

グラン・ギニユルに類するジャンルのものであることを考えると、絶対の科学的真実のうちにとどまりながらも、ドラマティックな側面に味つけをしなければならなかった。つまり、きわだどい側面を扱わざるをえなかった。

問題は循環的・周期的な狂気の一症例だったが、それをうまくこなすためには、

もちあわせのないさまざまな叡智が必要だった。そんなとき、友人のひとり、病院勤務のポール・ティエリー教授が、あの卓抜なジョゼフ・ババンスキとの関係をとりに来てくれた。こちらの大家がよるこんで知識の光を与えようとしてくれたおかげで、この劇作のいわば科学的な部分を大過なく扱うことができたのである。」

『気のふれた女たち』の念入りの制作過程にババンスキ博士が一役かっているのを知ったとき、私は大いに驚かされた。

かつて私は「仮インターン」の資格で、慈善病院(ラ・ピティエ)に勤務中の博士の補佐をかなり長くつとめていたことがあるので、この高名な神経病学者のことはしっかりと思い出にとどめている。

彼が示してくれた好意についてもいまだに名誉に思っているし一たとえその好意が、私の医者としての立派な未来を予言するほど見当はずれなものだったとしても！一、自分なりにその教えを活用してきたつもりでいる。

この件については、最初の『シュルレアリスム宣言』の末尾に賛辞を呈している。

(「ナジャ(アンドレ・ブルトン著、巖谷國士訳、岩波文庫)」55 ページ)